# 松井七郎先生の古稀への祝詞

松井七郎先生にはこの二月、古稀を迎えられました。つね日頃ご病気だなどと聞いたこともないほどご健康に恵まれ、今なお文字通り壮者を凌ぐほどでありまして、われわれ一同お歓びにたえぬところであります。

松井先生の学界に対するご功績、ご活躍、さらに同志社大学その他のご閲歴については、本号掲載の古米教授のその稿にくわしいので、あえてここに駄辞をつらねる必要を感じません。ただわれわれは、松井先生を想うとき、あの有名な「一粒の麦、地に落ちて死なずば」の聖句を、しみじみと感ぜずにはおられないのであります。

近代日本黎明期の先覚者新島襄先生と松井先生とのゆかり、その教え子で後に同志社総長となられた海老名弾正先生と松井先生との結び付き。これは偶然の結び付きではなくて、何だか予定されていたようにさえ感ぜられるのであります。松井七郎少年が郷土の先輩新島襄先生へ景仰思慕の情は家庭環境からも自然にそだち上り、それは同志社大学への入学となり、結実していったのでありましょう。また郷里に近い安中教会の牧師であった海老名先生が松井先生の御両親を洗礼されたというくしき結びつき。そして松井先生が同志社大学卒業後、アメリカに留学中、同志社総長としての海老名先生との出会い。その後招かれて同志社へ奉職されたこと。すべてこれ見えざる神のみ手による導きというにふさわしい事実ではありますまいか。先生こそは同志社大学のために遣はされた神の申し児とも見られましょう。爾来約四十年、松井先生は新島先生の思想の嫡流をうけつぐ教授として、誠実一路、幾千・万の学生に同志社精神を説いて来られたのでありました。又自ら教導された幾多の俊秀はわが大学の教壇に立たれておりすでに孫弟

子まである盛況であります。「一粒の麦、地に落ちて死なずば」、―確かに同志社精神は脈々と受け継がれてきているのでありましょう。

けれども現在の同志社はあまりにも巨大化してきました。それと共に同志社精神も稀薄化しつつあることは否定出来ない事実であります。また学風もどれが主流をなしているのか必ずしも明らかとはいえないでありましょう。このようないわば同志社大学としては重要な転換期、或は危機とさえいいうる時に当って松井先生は磐石の重きをなす方であります。にもかかわらず松井先生は、同志社を去られるのであります。大学として又学部としても惜別の情まことにたえぬものがあります。

さきにも記しましたように、先生は身心ともにお健やかで、なお厳しい学究生活に少しもお差支えないほどであります。ただこの機に臨むことになりましてからは、先生の今後のご健康とご研究の盛んであることをただただ祈念いたす次第であります。本号は経済学部一同が心をこめて、先生の古稀のお祝をいたしますと共に、感謝の一端を示す印であります。

昭和四十一年二月

経済学部長
小松幸雄